

インドネシア・中ジャワ州ソロ地方特定地域における 人間関係と出かせぎ様式

間瀬 朋子*

Human Relations and the Style of Circular Migration in a Specific Part of Solo Region, Central Java, Indonesia

MASE Tomoko*

Abstract

This paper examines how a sense of value for balanced reciprocity and dyad affects the style of circular migration for people from a specific part of Solo region, Central Java, using several case studies based on field research conducted in Village "A," Jatipurno Subdistrict, Wonogiri Regency, Central Java, Indonesia.

People tend to consciously avoid patron-client relations (impartial relations) with other people, and prefer mutual even relations. This inclination reveals itself in the case of their "arisan" (a regular social gathering for savings and loans) and wedding ceremonies. It also emerges in their style of circular migration. For them, all dyads except those with their own nuclear family members are very fragile. Thus they always try to very carefully maintain dyads with other people (for example, with relatives, neighbors, friends and so on) for which they have much difficulty in building. Actors separate fragile dyads from their business matters probably generating conflicts, mainly in relation to money matters. For these reasons they rarely cooperate with relatives, neighbors and friends in business.

Keywords: jamu, Solo (Surakarta) region, circular migration (*mboro*), informal sector, balanced reciprocity, dyad

キーワード：ジャムー、ソロ（スラカルタ）地方、循環型移動、インフォーマル・セクター、
均衡的互酬性、二者関係

I はじめに

ジャワ人にたいして、「核家族は、唯一の重要な親族関係の単位である」[ギアツ 1980: 3],

* 上智大学アジア文化研究所：Institute of Asian Cultures, Sophia University, 7-1 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8854, Japan
e-mail: kunir_asam_suki@hotmail.com

「ジャワの村落部では、世帯が政治、経済、宗教上の基本単位である」[Jay 1969: 55], 「核家族構成を基本とする世帯をのぞくならば、持続的集団の形成を可能にする制度的基礎は脆弱である。社会関係は、こうした個々の世帯間に隣人関係、せまい範囲の親族関係、その他の知人関係を通じて形成される」[関本 1976: 497], 「個人間の二者関係の卓越という事態は、ジャワ人の生活のあらゆる側面——経済、親族、宗教、儀礼、政治等々——に見いだされるもの」[関本 1978: 349], 「ジャワ人の社会関係の特徴は、個人ごとの広い社会的ネットワークの存在を前提にし、そのなかで微細な二者間取引を極大化するシステムに求めることができよう」[関本 1980: 406] などという見解がなされてきた。このような核家族観や個人的二者関係観が、ジャワ島中部に位置する特定地域出身の出かせぎモノ売りがおこなう商売様式に影を落としているようにみえる。彼らの出かせぎ商売を理解するには、彼らが作り上げる人と人との関係を分析することが重要である。

本論があつかうのは、中ジャワ州ソロ（スラカルタ）地方（Solo/Surakarta region）¹⁾の特定地域から発生する、ジャム（天然生薬飲料）売りを中心とするモノ売りグループである（図1参照）。

筆者のこれまでのフィールドワークにもとづくと、インドネシア全土²⁾で活動するジャム売りの大多数は、同地域の出身である。ジャム売りの配偶者が別種の出かせぎモノ売りであったり、ジャム売りの歴史をたどると別種のモノ売りにつながっている。そのため、ジャム売りの背後にさまざまな別種のモノ売りが存在し、ジャム売りを取り巻くひとつのまとまり（「ジャム売り集団」）が存在するようにみえる。この「ジャム売り集団」には、ジャム売りのほか、アイスクリーム売り、ジャワ風そば売り、ミートボールスープ（パツン）あるいは麺入りミートボールスープ売り、鶏そば売り、焼きそば・焼きめし売り、米粉の蒸し菓子（プトゥ）売り、紙製のトランペットやお面などのおもちゃ売り、靴・傘修理などがふくまれる。このような「ジャム売り集団」を送り出す地域（「ジャム売り集団」の送り出し圏）は、ソロ地方の特定地域に限られている。それは、複数の県・郡・村のそれぞれ一部をまたがる圏であり、行政的には中ジャワ州スコハルジョ県、ウォノギリ県、クラテン県、カランアニャル県の各一部にかかっている。

「ジャム売り集団」は、インドネシアの「インフォーマル・セクター」における一大モノ売り集団である。³⁾ 彼らがおこなっているのは、一定期間都市に出かけてはまた村に戻るよう

1) ソロ市、スコハルジョ県、ウォノギリ県、カランアニャル県、クラテン県、スラゲン県、ボヨラリ県の1市6県からなる、旧ソロ理事州の領域。

2) 地名については、本論末に付した「図4インドネシア全図、および本論関連地名」を適宜参照されたい。

3) ジャム売りの数を正確に推測するのは容易でない。生薬製剤メーカーのひとつ、ジャム・ジャゴ社の元社長・現監査役トップのジャヤ・スプラナは、ジャカルタ市だけで少なくとも5万人のジャム売りがいるとする [Kompas Oct. 26 2009]。

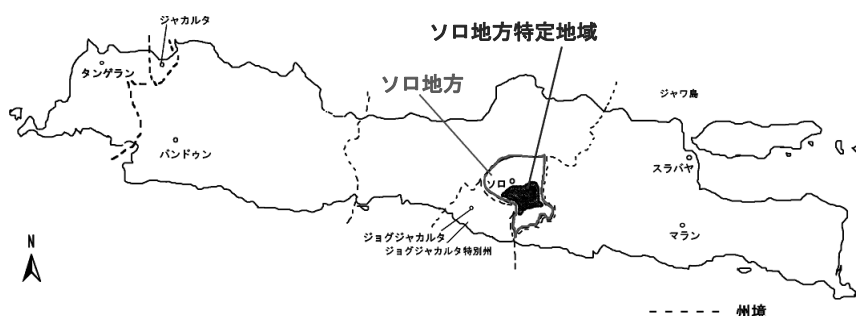


図1 ソロ地方、ソロ地方特定地域、および本論関連地名

出所：著者作成

な循環型移動、すなわちサーキュラー・マイグレーション (circular migration) である。これは彼らのことば (ジャワ語) で、ボロ (mboro) と呼ばれる。筆者のフィールドワークによると、「ジャム―売り集団」によるモノ売りとしての出かせぎ様式と出かせぎ商売をめぐるメンタリテイは、その出身地であるソロ地方特定地域に隣接する他地域 (ウォノギリ県南部、ジョグジャカルタ特別州グスン・キドゥル県など) の出身者のそれと比べると、強い個人主義的な気質に支配されている。一般的には、インドネシアあるいは東南アジアの「インフォーマル・セクター」は都市インヴォリューション⁴⁾ の枠組で概観されてきた。それは、村落部における人びとの経済行動様式が、相互扶助や共同体の意識などの一般的互酬性 (generalized reciprocity)⁵⁾ にもとづく概念を機軸に分析されてきたことに関連する。⁶⁾ ところが、ソロ地方特定地域出身の「ジャム―売り集団」の経済行動様式を理解するには、一般的互酬性の対極にある均衡的互酬性 (balanced reciprocity)⁷⁾ を基調にする概念、つまり打算や利己主義の概念を持ち出してくる必要があるのではないかという感触を得ている。

本論は、ジャム―売りやミートボールスープ売りをひとつの集団としてまとめて分析する方法を採用しながら、同集団の出自地域特有の歴史文化的・精神文化的な背景が彼らの出かせぎ経済活動にどう影響しているかを考察する研究である。より具体的に言えば、ジャワの一地域における独特の核家族観や二者関係観に裏づけられた人間関係が「ジャム―売り集団」のおこ

4) エヴァース [Evers 1975] が説明しているように、実質的な経済成長のない都市が農村からの流入者を受け入れ、貧困を分かち合う状況のこと。

5) いつなにをどのくらい返礼されるか (対価) を取り決めずにおこなわれる物品のやり取り。

6) 「就業者の多くが、共同体の伝統的価値規範に規定される農村からの移住者である事実を考慮すると、農村経済と同様に都市インフォーマル部門に通常の価格機構と異なる経済原理が存在している可能性を否定することはできないだろう」 [中西 1997: 538], 「(引用者注: 市場 (いちば) の零細女性商人たちは) 自分たちの生活の場である農村共同体の価値観の共有によって互いの競争を抑え、助け合っている。彼女たちの目的は『共に生きる』ことであり、個人の営利の追求そのものではない」 [嶋田 1997: 76] などと指摘されてきた。

7) 対価を明確に取り決めておこなわれる物品のやり取り。

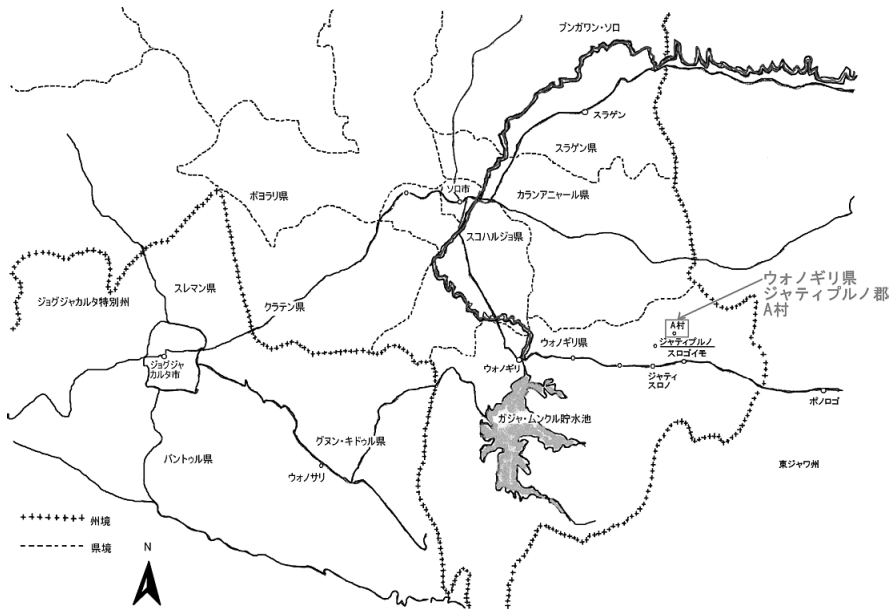


図2 本論調査の主要舞台, および本論関連地名

出所: 著者作成

なう出かせぎ商売様式にどのように反映しているかを、聞き取りで得た事例をとおして記述する試みである。⁸⁾

事例の主要舞台は、中ジャワ州ウオノギリ県ジャティプルノ郡A村M集落第1隣組 (RT1, dusun M, kelurahan A, kecamatan Jatipurno, kabupaten Wonogiri, JATENG)⁹⁾ (図2参照) である。

ここで、本論の構成を述べておく。続くII章で、中ジャワ州ウオノギリ県ジャティプルノ郡A村出身のジャムー売り・スキさんと鶏そば売り・スブルさんの夫婦を取り巻く親族関係を事例に、ソロ地方特定地域における二者関係のありかたを説明する。またスラマタン (selamatan)¹⁰⁾

8) 冒頭に引用したとおり、ヒルドレッド・ギアツ [1980] やジェイ [Jay 1969] によるジャワ人の家族観、ソロ地方の村落生活と社会関係にかんする関本の一連の業績 [1976; 1978; 1980; 2004]、宮崎 [1977] にあるジャワ村落における個人規定概念、クリフォード・ギアツ [Geertz 1960] や染谷 [1984] が観察したジャワ農村社会の儀礼における人間関係などを、本論は意識している。これらの先行研究が説明するジャワ村落の社会関係をフィールドで再検証しながら、同関係を「ジャムー売り集団」の出かせぎ経済様式とのつながりで説明する、あるいは同関係をもって同集団の出かせぎ経済様式を説明するのが、本論である。

9) 中ジャワ州ウオノギリ県ジャティプルノ郡A村M集落第1隣組での住み込み調査 (2002年1月の約1カ月間) をふくむ本論のもとになる調査は、2001年に開始され、現在に至るまでソロ地方特定地域各村での聞き取りや冠婚葬祭への参加の形によって、継続的に実施されている。聞き取りは主にインドネシア語、ときに通訳を介したジャワ語で実施している。

10) 人生の節目 (赤ちゃんの誕生、割礼、結婚、死去など)、病気、家の新築、旅行、収穫などの際、安全や平穏を祈願しておこなわれる、供食をとまなう儀礼。

の事例から、同地における二者関係が意味する均衡性や同関係の重要性を指摘する。III章ではまず、「ジャムー売り集団」の出身地周辺は一般的互酬性ではなく、均衡的互酬性にもとづく社会であるとする理由を暫定的に推測したのち、過去の返礼として、あるいは自己の将来の利益を期待して、現在とるべき行動を判断する同地方の人びとの姿を結婚披露宴の事例に見取る。さらに、均衡的互酬性に根ざした二者関係を重んじる同地域の人びとはどのような出かせぎ様式を志向するのかを分析したのが、IV章である。

II ソロ地方特定地域における二者関係

II-1. 二者関係の構築の仕方

中ジャワ州ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村M集落第1隣組出身のジャムー売り・スキさん（1962年生まれ、図3の(1)）と鶏そば売り・スブルさん（1957年スキさんと同郡同村K集落生まれ、図3の(2)）の夫妻は、1992年10月から東ジャワ州マラン県シンゴサリ郡へ出かせぎをしている。7年間の出かせぎで得た貯金を費やして、1999年、ふたりはスキさんの親の敷地内に家を新築した。¹¹⁾ 敷地の母屋には、スキさんの両親と跡取り娘である妹・スピさん（1968年生まれ、ジャムー売り、図3の(3)）一家が住んでいる。スキさんの弟スルさん（1970年生まれ、鶏そば売り、図3の(4)）一家も、同じ敷地内に独立した家屋を建てている。スキさん夫妻、スピさん夫妻、スルさん夫妻は、みなマラン県シンゴサリ郡へ出かせぎ中なので、通常この敷地内でくらすのはスキさんたちの両親と彼らの子・孫世代である。3世帯の親族が同一敷地内に屋根を並べているとはいえ、毎日の買い物も、料理も、洗濯も、客へのもてなしも、スラムタンも、各世帯が別々におこなっている。ここでは、核家族世帯が日常生活の基本単位である。

筆者はスキさんの村を訪れるたびに、母屋の客間に招き入れられ、甘いコーヒーとテンペ（大豆発酵食品）フリッター、豆菓子などでもてなされる。母屋の主であるスキさん兄弟姉妹の両親、母屋の相続主であるスピさんの子どもたち、スキさんの子どもたちのほか、出かせぎ先から戻ってればスピさん夫妻、スキさん夫妻、スルさん夫妻が母屋に集まり、みなで筆者と歓談する。しばらくすると、筆者という客のために食事になる。小粒の黒豆やパパイヤの葉

11) この地方では、婚姻によって男性は生誕地を離れ、配偶者の女性の生誕地に住み着くのが一般的である。スブルさんはスキさんと結婚し、スキさんの出身地に身を寄せることになった。同地方において、両親の財産（家屋敷、田畑など）を相続するのは、通常、最年少の娘である。そしてこの跡取り娘が、両親の最期を看取る義務を課される。あるいは最年少の娘でなくても、両親を看取る子どもが親の財産を相続するのがふつうである。水田持ちの世帯であっても、すでにそれ以上分割できない規模（0.2ha内外）であることがほとんどのため、兄弟姉妹で親の水田を均分相続するケースはあまりない。6人兄弟姉妹（男性4人、女性2人）の長女であるスキさんに両親の財産を相続する権利はなく、両親の家屋敷地内に自前で住宅建設することだけが容認されている。

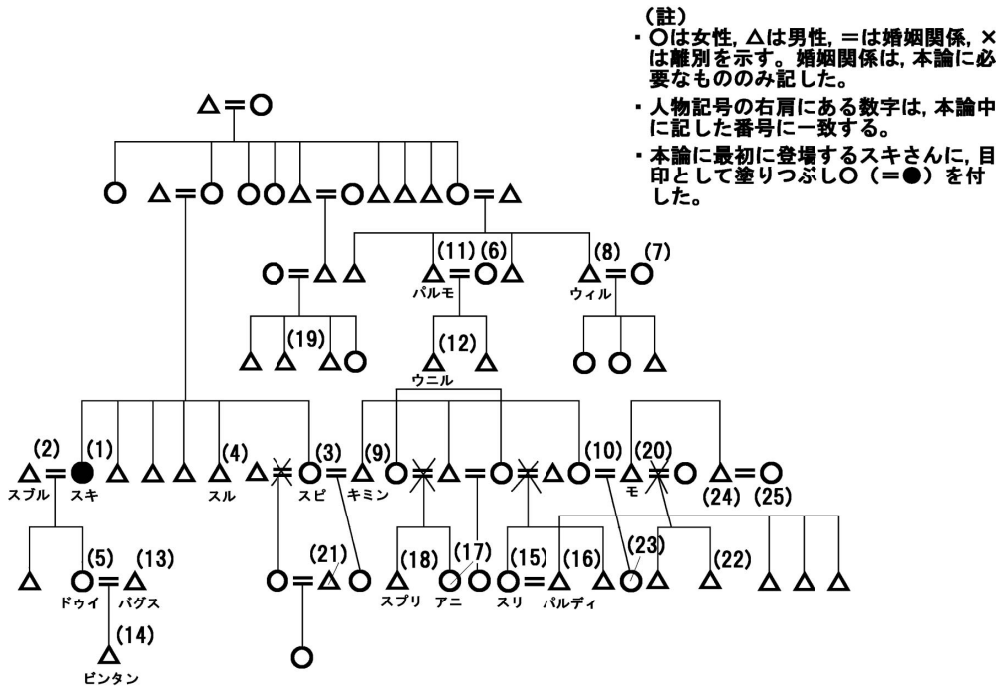


図3 本論登場人物関連図

出所：フィールドワークにより著者作成

をココナッツミルクで煮込んだもののような、彼らが日常的に食べているものが出てくる。飲んで食べて、話が一段落すれば、スキさん夫妻は「今度は、うちにいこう」と、母屋の裏に建てた自宅へ筆者を誘う。筆者がスキさん夫妻の客間のソファーに腰掛けるやいなや、コーヒーが出される。数分前に母屋でいろいろ食べてきたばかりなのに、食事が出される。それから1時間もしないうちに、今度はスルさんが「うちにも寄っていくよね?」と、スキさんの家まで筆者を呼びにくる。母屋の東横に建つスルさんの家を訪れると、ふたたびお茶と食事が供される。母屋でみな揃って歓談したにもかかわらず、各世帯が改めて筆者をもてなす。スキさん一家と知り合ったばかりのころ、筆者は各世帯でほぼ同時に繰り広げられる同種のもてなしに戸惑ったものである。無理をしてすべてをおなかに詰め込んだり、ときに一切を断ったりしたこともある。しかし最近では、ある家でグラスに半分ほどのコーヒーを飲み、スプーンで2杯ほどのごはんとおかずを食べ、早々に次に移る要領で、すべてにつきあうことにした。それがいちばんみなを喜ばせるからである。

筆者という客をめぐっては、母屋の両親も、兄弟妹夫婦も、スキさんに一目を置いている。出かせぎ先の東ジャワ州にて筆者と出会い、最初に筆者との関係を築いたのは、彼女であるとの理由をもってである。スキさんを通じて、彼女の家族は筆者と知り合った。スキさんの家族

はみな、筆者がだれよりも彼女の客であることを心得ている。スキさん自身も、自分だけが永遠に筆者の特別なパートナーであることを望んでいるようである。スキさんは、自分を主軸にすることを条件に自分の家族が筆者と交わることを許しているようにみえる。彼女と筆者の関係がひとつ高次で安泰なら、スキさんの家族と筆者が別の二者関係を構築しても問題はないようである。母屋でコーヒーを飲んだあとで、スキさんのいとこの家で紅茶を出されていたとしても、いったんスキさんの家に入れば、筆者はさらにもう一杯なにかを飲む。それがスキさんたちの輪のなかで心地よく過ごす秘訣であると思うし、実際にうまくやってきた。

スキさんと筆者のあいだ、または彼女の家族やそのほかの村びとと筆者のあいだに、保護—服従の関係はみられない。スキさんたちが、外国人である筆者を自分たち以外の外部から保護しようとする以上の保護—服従の関係は存在しない。彼ら自身が、彼らと筆者のあいだにそのような関係が作り出されることを努めて回避しているように思われる。たとえば、カネの貸し借りや商売の話を筆者に持ちかける人は、いまだかつてない。¹²⁾ おそらく、彼らの多くは、特定の二者関係が保護—服従の関係になるのを避けたがっている。後述するが、保護—服従の関係、言い換えるとパトロン—クライアント関係は、彼らにとって心地よい関係ではないようである。

II-2. 核家族単位の重要さと他者との均衡的互酬性——スラムタンの事例

イスラム教徒が断食月（ポソ月あるいはプアサ月／ラマダン月）に入る1日前（ルウァ月／シャバン月最終日）、断食月が終わろうとする日、¹³⁾ スロ月1日（イスラム暦の元日、ムハラム月1日）などに、ソロ地方の村びとたちはスラムタンをおこなって安寧を祈願する。各世帯は、スラムタンの食べものを準備するのに忙しい。チークの葉を敷いた大きな竹製ふるいの真ん中には、大きな円錐形のごはんが据えられる。その周りに小さな円錐形のごはんがいくつか並べられ、賽の目切りのテンペをチリソースで和えたものやビーフン炒めなどのおかずも添えられる。こうしたメニューは、毎回ほとんど変わらない。各世帯は、客間に莫産を敷き詰め、大小の円錐型のごはんがポコポコと並んだ大きなふるいをその中心に据える。¹⁴⁾

12) スキさんの家族やその隣人とかかわりを持ち始めた当初から筆者に期待されたのは、彼らとの距離を縮める努力をすることであったと感じている。村への寄付をふくめ、彼らに金銭的援助を求められたことはない。彼らの冠婚葬祭に駆けつけたり、だれかが病気のときにはお見舞いをしたり、数週間から数カ月に一度は村を訪問したりという、村びと同士の場合と同様のつきあいが、求められてきた。A村以外のソロ地方特定地域でも繰り返し聞き取りをおこなってきたが、特定の村びとと親しくなろうとなるまいが、直接的・間接的に謝礼を求められたことも、そのような雰囲気を感じたこともない。単に筆者が鈍感であるために、彼らからの要求に気づけなかったとは思われない。

13) クリフォード・ギアツが「ジャワ人はシャワル月1日、つまりレバラン（引用者注；断食月明け大祭）にスラムタンをおこなう」[Geertz 1960: 79]としたことについて、クンチョロニングラットは「クリフォード・ギアツの説明には納得いかない（シャワル月1日に、スラムタンをおこなうはずがない）」と述べている [Koentjaraningrat 1994: 369-370]。実際には、シャワル月1日の前日（断食月の最終日）に、スラムタンがおこなわれている。

14) スラムタンの描写は、クリフォード・ギアツ [Geertz 1960]、関本 [1976]、染谷 [1984] などに詳しい。

スラマタンの準備にたいする指揮を執るのはたいてい女性であるが、男性が台所仕事をしないわけではない。結婚披露宴や割礼など派手に客をもてなす機会には、隣近所の人びとがたくさん手伝いにくるため、男女は台所仕事とその他の仕事を分業できる。しかし、暦にもとづくスラマタンの場合、隣近所が一斉にそれぞれスラマタンを支度するので、各世帯は夫婦と子どもが協力して、それぞれの準備をこなさなければならない。ソロ地方の男性がかまどの火の番をしたり、鍋を洗ったりして、台所で時間を過ごすのは、ごくありふれたことである。

アサル（昼下がりの礼拝時間）からマグリブ（日没の礼拝時間）の前にかけて、ある世帯のスラマタンに集まった男性客は、円錐飯の並んだふりを囲んで座る。集会自体は15分ほどで終わる。地域の慣習¹⁵⁾やイスラム教義に詳しいとされる集落の重鎮、あるいは村のムディン（宗務役）が会のなかで主に祈るが、閉会に際して出席者のみで祈りを唱和する。閉会になると、出席者たちはふりに盛られた食べものをチークの葉に包んで、各世帯へ持ち帰る。暦にもとづくスラマタンの食べものを直接皿に取って、その場で食事をしたいと思う人は、あまりいないであろう。自身の世帯で同種の食べものを料理したばかりであるし、引きつづき隣近所でも同種の食べものを分配されるからである。

ある世帯のスラマタンに集まるのは、隣組よりもっと小さなまとまりの人びとである。通常、自宅から東西南北3、4軒ほどの計十数人の世帯主がひとつのスラマタン・グループを構成する。グループ成員が多すぎると、面倒なことになる。というのも、個人的な都合でおこなわれる結婚や割礼のようなスラマタンをふくむ一連の行事と異なり、断食入り前やスロ月1日などの暦にもとづくスラマタンの場合、全世帯が同日の同時間帯に一斉にスラマタンを催すためである。したがって、各世帯主はグループ内のある世帯で祈りを捧げて、食べものを受け取った直後、別の世帯に移って、やはり同じように祈り、同種の食べものをもらって帰ることを十数回繰り返さなければならない。こうしてスラマタン・グループを周遊すること、つまり十数世帯で同じ祈りを捧げ、同種の食物分配を受けることが、各世帯主の義務である。グループ周遊の前には、自身の世帯の台所や墓で、芳香を放つ花びらを浮かべて香水を垂らした聖水やたばこなどのお供えもの（スサジェン）を前に祈る。調理準備、事前の祈り、グループ周遊を合わせると、スラマタンのためにたっぷり1日が費やされる。

筆者のような部外者は、スラマタンをどこか一カ所に代表させて、一度に祈って終わりにすれば時間も料理も節約できるのではないかと、つい思う。せめて、同敷地内に住む血の繋がりのある世帯同士でひとつのスラマタンを主催すれば、事態はずいぶん簡便化されるだろうと考える。各世帯に持ち帰られたチークの葉に包まれたごはんは、次第に乾燥して硬くなり、そのまま村びとの口に入ることはめったにない。ところが、準備やグループ周遊がかなりの物理

15) この地域の人びとの多くは、慣習観念や土着信仰をふくんだクジャウエン（ジャワ的なるもの）をイスラム信仰よりも重視し、実践する。

的・肉体的・精神的負担になっているにもかかわらず、スラマトンの簡便化や取り止めを訴えるあからさまな動きは、各世帯にほとんどみられない。

- スラマトンは面倒と言えば面倒だけど……。でも、ほかにどうしろというの？ やらないと一人前にみてもらえないし。(前述のスキさん，2006年9月23日聞き取り)
- スラマトンは手間ではないし、当たり前のことである。面倒だ、あるいは止めたいと考えたことはない。(パルモさん，スキさんと同村の出身，70歳代男性，農業従事者，2007年6月20日聞き取り)
- スラマトンは面倒。止めたい。若い世代はそう思っている。でも、やっている。止めようと訴える人も、実際に止めた人も、今のところいない。上の世代が伝統的なことを勝手に止めてはいけないと言うから。(スリスさん，スキさんと同村の出身，20歳代女性，教員，2010年9月20日聞き取り)

供される飲食物がいつでもどこでも同じであるような村びと間の均衡性や、すべての核家族世帯で平等に祈りを捧げなければならないとされる互酬性は、この地方に際立っている。聞き取りをまとめれば、他人に自分の世帯の安寧を祈ってほしいから自分も他人の世帯のために祈る、自分自身が外に築いた夫婦という大切な二者関係が営む核家族をいちばん大切にしたいというのが、この地方の人びとである。

- 日常生活は、夫婦と子どもがいっしょというのがふつう。父母・義父母をふくめ、3世代が1世帯の場合もある。兄弟姉妹やいとこ、その家族との関係も近いけれど、自分の親・子との関係とは違う。(姉弟世帯が同敷地内にあっても、次女を残して出かせぎに行くのを嫌い、ひとつ屋根の下に長女をつき添わせる、前述のスビさん，2010年8月6日聞き取り)
- 大事なものは、妻と子。父母のくらしも、気になる。でも兄姉夫婦やいとこたちにはなにか申し立てをして波風を立てるより、黙っておくほうがいい。それがよいに決まっている。(前述のスルさん，2010年8月5日聞き取り)

このように、村びとのあいだでは核家族世帯がものごとの基本単位である。彼らにとって、核家族だけが揺るがすことのできない関係である。核家族以外の親族、隣人、友人などとの関係は二次的なものであり、それゆえ注意深く、努めて大事にしなければならない、脆弱なものであるということになる。

核家族の単位に込められた重要性や、他者との均衡的な（平等な）互酬性を基盤とした二者

関係への志向は、「ジャムー売り集団」の出かせぎにも影響をおよぼしている。それらは、同種の商売をしても仕入れや調理は各人でおこなったり、近い親族や同郷の友人とであっても、合資で起業するのを嫌がったり、人に命令される工場労働者、家事手伝い、元締めのある建設現場工などになるのを極力避けたり、モノ売りとして親方のいるポンドック制度¹⁶⁾の下に長く縛られたくなかったり（親方として、長く子分を縛りつけなかったり）するような、彼らが出かせぎ様式や出かせぎメンタリティとして表出する。

III アリサン社会

III-1. ソロ地方特定地域の出身者と村落共同体意識

ソロ地方特定地域における二者関係は、純粋な相互扶助の概念からだけでは説明されがたい。筆者のフィールドワークによれば、同地域は相互扶助的な慣行の存在する地域であっても、それを基調とする社会ではなく、あるものごとの対価や報酬をはっきりと定めたアリサン¹⁷⁾的な側面が顕著な社会である。冠婚葬祭の実施、住居の建築、公共施設の建設や清掃、農作業などをめぐる相互扶助は存在するにせよ、参加・協力しないと、あとでだれになにを言われるかわからないし、恥であるという面目や、今回参加・協力しないと、のちに自分の家でなにかがあってもだれにも手伝ってもらえないという打算があるから、相互扶助的な慣行を保持している社会である。無論、こうした性向はどこの社会にも多かれ少なかれみられる。しかし、ソロ地方特定地域は、以下具体的に例示するとおり、一見相互扶助的な慣行が色濃い伝統社会でありながら、実は等価交換や対等性を保持することに際立って敏感な社会である。同地の人びとは、二者関係による一切の決定においてつねに責任を公平分担するような、ある意味無慈悲なメンタリティを有している。きわめて商人的なメンタリティをしていると言ってもよい。¹⁸⁾

諸先行研究〔森 1969; 内藤 1977; 宮本 1993 など〕にみるとおり、伝統的な封地制度が敷かれ、王族、貴族、臣と一般村民とのあいだのパトロン-クライアント関係が強固であったこと

16) ポンドックは小屋や寄宿場を意味する。ポンドック制度という場合、商業的な契約を敷いて、親方が徒弟のために出かせぎ先への渡航費、出かせぎ先で寝泊りする場所、商売道具などを準備し、徒弟を出かせぎ先に受け入れる制度を指す。契約によって出かせぎに誘われた徒弟は、一定の期間、分益制の下で親方に商売利益を吸い上げられる。同制度については、ジェリネック [Jellinek 1977] が詳しく説明している。

17) 頼母子講のこと。参加者から定期的に徴収したお金をプールし、貯まった資金を供与する順番をくじ引きで決めるグループ活動。低所得者でもまとまった資金を手にできる、一種のマイクロファイナンス。参加者は、みながひととおり資金を手にするまで、勝手にグループを抜けられずに、拘束される。各参加者に遅かれ早かれ資金を手にする機会が保証されているから、こうした活動が成り立つ。

18) 「ジャワ人の小売商人たちは、粗野な個人主義者であって、市場全体は古典派経済学者アダム・スミスの需要-供給の動きを基準にして機能しているように見える」〔ギアツ 1980: 10〕という、ヒルドレッド・ギアツの指摘に通じるところが大きい。

は、ソロ地方をふくむ旧王侯領の特徴とされてきた。それとソロ地方特定地域の社会経済慣行にかんする筆者の聞き取りをやや大胆に関連させると、王侯領の社会経済制度（一般村民に土地所有権は認められず、王族・貴族・臣が一般村民を強制労働させることによって、農作業を実施する制度）が同地域に村落共同体をはぐくむのを阻害した可能性があると思っている。各村落内部でも裕福な耕作権保有者と零細な耕作権保持者または非保有者との経済格差が開いていたため、村民同士の連帯が生まれにくかったり、共同体意識がじゅうぶんに育たなかったりしたのかもしれない。王侯領という土地柄のもたらした不平等社会の歴史によって、ソロ地方特定地域出身の人びとは共同体意識を欠き、一切を自己責任として個人主義的に行動する様式を好んで採用し、他者との対等性を重んじるようになったのではないかと、聞き取りから漠然と考える。しかし、これにかんしては、文献精査もふくめてさらなる分析・考察が必要である。

III-2. 均衡的互酬性の重要さ——結婚披露宴の事例

前述のウォノギリ県ジャティプルノ郡A村出身のジャムー売り・スキさんの夢は、子どもを早く結婚させることである。この夢は、当時高校生であった娘のドゥイさん（1987年生まれ、図3の(5)）の妊娠を契機に、予想をはるかに上回るスピードで実現した。2005年、娘の妊娠発覚から2カ月足らずのうちに、スキさん・スブルさん夫妻は、各方面に招待状を配布し、自宅敷地内に会場を設置し、料理を段取り、二晩がかりの結婚披露宴を催した。

台所仕事が本格的に忙しくなったのは、披露宴の5日前からである。伝統的な祝い菓子ジュナン（モチゴメ、ヤシ砂糖、ココナッツミルクで作る餅菓子）を練ったり、牛1頭分の牛肉を刻んだり、大量のんにくや赤シャロットの皮を剥いたり、巨大な鍋でレバーとじゃがいもの角切りをチリソースで和えたり、ヤギ肉を炒めたりするために、牛小屋の真横にビニールシートの日除け・風除けを張って作った仮設の台所は5日間フル稼働した。土造りのかまどにかけられた鍋から湯気が消えることはなかった。

披露宴のメニューは、ウォノギリ県やスコハルジョ県など広くソロ地方では、どこでも似たり寄ったりである。甘い紅茶、んにく風味のピーナッツ、ウンピン（ほのかに苦味のある、グネツム・チップス）、ジュナン、ジャダ（甘くない餅菓子）、クエ・ボル（シフォンケーキ風の、ふわふわとした洋菓子）¹⁹⁾が、参列者にまず供される。菓子を切り分け、皿に盛るのも、それを客にふるまうのも、基本的には男性の仕事である。それからトゥリッ²⁰⁾と呼ばれる、牛肉を赤シャロット、トマト、キャンドルナッツなどのペーストとココナッツミルクで煮込んだものをメインに、牛骨ベースの澄まし仕立てのスープ、レバーとじゃがいものチリソース和え、

19) 最近では、ロールケーキの場合もよくみられる。

20) トゥリッ (terik) はジャワ語で「乾燥した、汁気のない」の意味。一般的には、ラピス・ダギンとして知られる料理。

白飯、えびせんべいが祝い膳として出てくる。10畳ほどの広さがあるスキさん宅の常設屋内台所は、できあがった食べものを保存したり、食べものを皿に取り分けたり、給仕係の男性たち（新婦側親族の青年たち）が待機したりする場として使われた。

重労働の飯炊き（女性2人）と皿洗い（男性2人）には、日当（2万ルピア〔約260円〕程度²¹⁾）が支払われる。彼らは結婚披露宴のある家の親族成員や隣人ではなく、それを職業とする村びとである。それ以外の労働には、親族、隣人、同郷の友人たちが無給で借り出される。披露宴主催家の向こう10軒ほどに住んでいる親族と隣人は、老若男女問わず、時間の許すかぎり、結婚披露宴の裏方を担当する。裏方役はゆうに30人を超える。無給でよいとはいえ、全面的に準備を手伝う裏方とその家族のために、披露宴準備期間をとおして、花嫁の親が毎回の食事を提供する。彼らのためにヤギがつぶされ、調理される。ヤギは結婚披露宴のご馳走ではなく、裏方のまかない食である。

裏方をふくめて、結婚披露宴を開催する世帯の親族や隣人たちには、米、ココヤシの実、バナナ、砂糖、お茶などの現物を祝儀として供出する義務が課されている。彼らは^{ほうろう}瑣瑣引きの洗面器に、米などを包んで、結婚披露宴主催者世帯へ持っていく。布の結び目には、自分（供出者）の名まえ、現物の品名と量を記したメモ紙をホッチキス留めしておく。このメモ紙の内容は、披露宴の主催者にきちんと把握してもらわなくてはならない。今後いつか、今回の供出者自身が結婚披露宴を催す際、等価の現物祝儀を返済してもらう義務を今回の披露宴主催者に対して課するためである。²²⁾ 今回の披露宴主催世帯は、メモ紙をもとに帳簿を作成し、近隣で別の披露宴があるたびにそれを広げる。この帳簿は、均衡的互酬性を確実に実行するために存在する。²³⁾ 祝儀の交換は、たんなる口約束でも心理上の負担でもなく、村落共同体意識の上位に個人主義や個人間の平等概念を置く同地域出身者のあいだでは、れっきとした契約事項である。

現金祝儀にたいしても、現物祝儀と同じく、今回の披露宴主催者には将来の返済義務が課される。近親間では、一般的互酬性のメンタリティをもって祝儀の額は贈る側次第で、富める親族成員が貧しい親族成員を援助することもありうる。しかし、披露宴主催者のごくふつうの親族、遠縁、隣人、同郷の友人たちは、「かつて自分がもらった分だけ贈る」、あるいは「今後自分がほしい分だけ贈る」という均衡的互酬性の原則に従うのが通常である。昨今、ソロ地方における均衡的互酬性にもとづく現金祝儀の額は、2万～3万ルピア〔約260～390円〕である。披露宴主催者と同村、まして同集落に住んでいる人びとは、かならず現金・現物祝儀を持って

21) 筆者が集中的にフィールドワークを実施した2002～07年ごろ、1,000ルピアが約13円の交換レートであったため、便宜上、本論の情報はすべてこのレートで換算した。

22) 結婚披露宴の描写や祝儀をめぐる等量交換（均衡的互酬性）の原則にかんしても、関本〔1976〕に詳しい。

23) スキさん・スプルさん夫妻が催した披露宴の現物祝儀帳簿を例示する（表1参照）。同様の帳簿を、彼らの地方のほぼ全世界帯が保有している。

表1 現物祝儀にかんするスキさん・スブルさん夫妻の帳簿（抜粋）

氏名	住所 ¹⁾	米 ²⁾	砂糖 ³⁾	茶 ⁴⁾	ココナッツ ⁵⁾	ビーフン ⁶⁾	たばこ ⁷⁾	テンベ ⁸⁾
Biyung		15	2	1	10			
Giyem		17	3	2	20			
Upi		20	4	1	0			
Karmi		18	3	1	20			
Narmi		10	1	1	0			
Lastri		9	2	1	0			
Mandor		32	5	2	0			
Kamidi		10	2	1	20			
Karsi		5	0	0	0			
Watik		5	0	0	0			
Pari		10	1	1	11			
Juru		9	1	1	10			
Giyati		5	1	1	0			
Karni		5	2	1	8			
Mibah		7	2	1	0			
Marmi		5	1	1	0			
中略	中略	中略	中略	中略	中略	中略	中略	中略
Yoto	Koripah	7	15	2	0			
Suyatni	Badran	3	0	0	数不明			30
Dariyem	Jaten	5	1	1	0			
Jumanto	Jaten	3	1	1	0			
Parmi	Gelo	10	2	1	数不明			
合計		973	235	130	216	8	1	97

出所：筆者作成

注：1) ごく近い関係で、顔見知りの場合、住所の記載は省略される

2) 単位は、ブルック（ヤシ殻製の計量容器で、一杯が約1.25kgの米に相当）

3) 単位は、kg

4) 単位は、袋（50g入り紙包みの10個詰め）

5) 単位は、個

6) 単位は、袋

7) 単位は、カートン

8) 単位は、個

祝いに駆けつけなければならない。こうした慣習がこの地方における大規模な冠婚葬祭文化を支えている。

したがって現金祝儀の総額は、事前に見積もりうる。スキさん・スブルさん夫妻の場合、自分たちが送った招待状の数をもとに、訪問客数を1,500人と見込んだ。そしてその訪問客が2万ルピア〔約260円〕ずつ持ってくるとすれば、合計3,000万ルピア〔約39万円〕の現金祝儀が入ると算出した。それゆえ、夫妻は娘のために2,000万ルピア（約26万円）規模の結婚披露宴を催す心積もりで、動き出した。

スキさん一族が居住する屋敷地を披露宴会場にするため、テントや椅子を業者からレンタル

しなければならない。披露宴の第1日目には、ガムラン（打楽器を中心とするアンサンブルによって演奏される伝統音楽）演奏隊やカメラマンも雇うことにした。娘と婿の結婚衣装も、それぞれ2、3点借りておく必要がある。これらの支払いは、結婚披露宴ののち、現金祝儀の箱を開けてからでもよい。米などの現物祝儀が手に入るのは、披露宴当日か、早くてもその2、3日前になる。披露宴の食事の準備などは、それ以前から始めなくてはならない。したがって、とりあえず必要な食材などを購入するだけの現金は、スキさん・スブルさん夫妻自身で用意する。子ヤギ2匹（60万ルピア〔約7,800円〕相当）は、スキさんの父親が育てるものを現物祝儀としてもらえることになっているが、夫妻にはそのほか牛1頭、鶏12羽、ニンニク10kg、赤シャロット10kgなどを購入するために1,000万ルピア〔約13万円〕程度の現金が必要である。ジャムー売りや鶏そば売りの夫婦にそのくらいの貯えはあるのか、特に困ったそぶりはなかった。²⁴⁾ 現物祝儀は受け取って直接使ってもよし、あとで売却して現金化することもできる。

蓋を開けてみれば、この披露宴への訪問客の数は2,000人にのぼった。そのため、追加の祝い膳に牛肉50kgを買い足したり（200万ルピア〔約2万6000円〕の追加出費）、町の菓子屋に注文したクエ・ボルが意外に高かったり（200万ルピア〔約2万6000円〕の追加出費）、事前の計算と異なることが数々あったにしても、費用総額は2,200万ルピア（約28万6000円）となり、訪問客が持ってくる現金祝儀でまかなえる範囲に収まった。

すると、結婚披露宴終了の時点でのスキさん・スブルさん夫妻の財布は、千数百万ルピア（十数万円）の黒字である。ところが、夫妻にこの残ったカネが自分たちのものであるとか、儲かったとかという気は、まったくない。娘の結婚を祝ってくれたすべての人にたいして、彼らは恩義を返していかなければならない。村でだれかの結婚披露宴があれば、それ相当の現金祝儀や現物祝儀をもって出向く義務があらためて課された。出かせぎ先のマラン県シンゴサリ郡から村まで駆けつけるのだから、祝儀のほか交通費もかかるし、商売を休んで本来得られるはずの稼ぎを見送らなければならない。今後、多いときには一カ月に十数通の披露宴招待状が届くだろう。²⁵⁾ 今回の黒字はこれから恩義を返済していくための費用として、スキさん・スブルさん夫妻に認識されている。

結婚披露宴の規模の大きさも、その祝儀にまつわる均衡的互酬性も、広くソロ地方の特色である。近年、特にインドネシアの都市部では、訪問客の祝儀を当てにして結婚披露宴を開催す

24) 差し当たり必要な現金をとりあえず近い親族から借りる人もいる。返済が確實視されているため、銀行などからの借入れも容易である。

25) 2010年4～6月は、結婚披露宴シーズンであった。2005年7月に披露宴を催したスキさんには約10通、2008年10月に披露宴を催したスキさんの妹スピさんには約15通の披露宴招待状が届いた。また、2011年3月には、スキさんとスピさんそれぞれに11通の同招待状が届いた。同3月26日の一日だけで、ふたりは4件ずつの披露宴を梯子した。スキさんたちは、故郷と出かせぎ先を数日ごとに往復したり、ときに10日間も出かせぎ商売を休んだりして、披露宴参列の義務を果たしている。それぞれの帳簿にもとづいて言えば、現在までにスキさんの場合で約4割、スピさんの場合で約3割の恩義を完済している。

ることをしない。隣近所が集まって、将来催される結婚披露宴のための協同組合的な資金プール制度やアリサン制度を設けるところは多い。しかし、披露宴主催者は訪問客の祝儀を基本的には当てにしないし、訪問客は現金祝儀の袋に記名する必要もない。ソロ地方の披露宴では、記名ずみの現金祝儀袋が放り込まれる箱の脇に小さな魚を泳がせた水槽がかならず置かれる。「トゥユルと呼ばれる子どもの精霊が、魚を眺めるのに夢中になって、カネをくすねるのも忘れてしまう」との言い伝えから、魚は祝儀の見張り番とされてきた。魚が見張っているのは、祝儀泥棒であると同時に、均衡的互酬性の原則が犯されないようにということかもしれない。

結婚披露宴の事例は、スキさんの村をふくむソロ地方特定地域の人びとの生活が、広く均衡的互酬性に支配されていることを示す。同地方の人びとの行動様式は巨大なアリサングループとしてとらえるとわかりやすい。彼らは過去の返礼をするために、そして自己の将来の利益を期待して、現在とるべき行動を判断している。²⁶⁾

次章にみる、独立独歩で商売をする姿勢や、パトロン—クライアント関係（一般的互酬性の発展形態）に基礎を置くポンドック制度を長期的に維持しない出かせぎ様式に表れるように、ソロ地方特定地域出身者たちは一般的互酬性の背後にある無尽蔵な愛情を断ち切り、均衡的互酬性の支配する、ドライな（冷淡な、さばさばした）経済社会生活を営む傾向がある。すると、これまでしばしば都市部へ出かせぎ者たちを分析する際に適応されてきた「貧困の共有」²⁷⁾や「都市のなかのムラ」²⁸⁾などは、ソロ地方特定地域出身のモノ売りたちのメンタリテイに、そもそもなじまない概念であると言えるかもしれない。

IV 二者関係とソロ地方特定地域出身者の出かせぎ

IV-1. ソロ地方特定地域出身者の出かせぎ様式

立ち退きを迫られた鶏そば売りキミンさん、商売場所を失ったウィルさんの事例

東ジャワ州マラン県シンゴサリ郡で鶏そばを商うキミンさん（男性、1966年ウォノギリ県

-
- 26) 冠婚葬祭以外の事例を提示しておく。標高の高いスキさんの村周辺では、出かせぎ収入で、テレビの映りをよくするためのパラボラアンテナを設置する人が多い。アンテナはパラレル接続できるから、本来、数世帯が集住する同一敷地内にひとつあればじゅうぶんである。にもかかわらず、各世帯単位でアンテナを購入・設置するのが、同地方ではふつうである。だれかが負担を強いられ、ほかのだれかがその負担に相乗りして利便性だけを享受するような均衡的互酬性の原理に外れる状況は、努めて回避されている。生活用水にしても、水源から各世帯まで細い管が一本ずつ敷かれている。遠い水源から太い親管を共同で敷き、各世帯付近で親管から枝分かれする子管を敷く方法は、採用されない。
- 27) クリフォード・ギアツ [Geertz 1963] にある、ジャワの水田地帯における労働機会と所得の分配のありかた。それが都市にも適用され、経済的なパイを細分化することによって、都市が村落から流入しつづける人口を受け入れることや、そうすることで全般的には都市経済が停滞したり、悪化したりしている状況を指すことばとして用いられる。
- 28) パパネック [Papanek 1976] 以降、「インフォーマル・セクター」の実証研究において引き継がれてきた文脈。倉沢 [2007: 16] は、「都会の中に作られた田舎」が「ロケーションは都市にあっても、故郷の生活様式、人間関係、慣習を維持した共同体」であると説明している。

ジャティプルノ郡A村N集落生まれ、図3の(9))は今から数年前、郡市場(いちば)が県の再開発計画によって改修工事されようとした際、同市場(いちば)の敷地内で操業する自分の屋台が立ち退きに遭うのではないかと困惑した。立ち退き後も同じような戦略的な商売場所を得られるかどうか、不安でたまらなかった。鶏そば商売の腕前には、自信がある。スラバヤーマラン街道に面した、郡市場(いちば)のキオスクを借りて安定的に商売をすれば、今までより儲かると想像した。長期的に商売を考えるならば、最低5年間契約でキオスクを賃借りしたり、それを購入したりしておくのがよい。しかしそれには、最低でも約3,000万ルピア〔約39万円〕のまとまったカネが必要である。そのような高額をすぐにひとりで工面するのは、無理である。同じシンゴサリ郡のK通り沿いで、やはり鶏そばを屋台売りする義弟のスルさん(前述の図3の(4))と組んで、元手を折半すれば、なんとか市場(いちば)にキオスクをもって商売を始められるかもしれないと、キミンさんは考えないわけでもなかった。しかし、考えれば考えるほど、兄弟でいっしょに商売をすることに、気乗りがしない。なにかと精神的に折れなくてはならない状況が出てくる上、結局は収入も減るだろうと思った。義弟のスルさんにしても、路肩での屋台商売を止め、市場(いちば)にキオスクを持てば、今より稼げると思っている。スルさんにとってのキミンさんは、人間的に信頼できるし、商売上手な義兄である。ところが、そういうキミンさんであるからこそ、スルさんはいっしょに商売をしたくないと思っている。キミンさんとの兄弟関係がなにかのきっかけで壊れるのが恐いし、もし商売上の不平不満が出てきても、キミンさんには直接文句を言いにくいからだという。それゆえ、兄弟で市場(いちば)に共同のキオスクを持つ話は、今のところ実現しないし、将来的な実現の可能性も薄そうである。

マラン県シンゴサリ郡中心部における鶏そばの屋台商売や行商はすでに飽和気味である。ここにはすでに、キミンさんの親族だけで9人もの鶏そば売りがいる。郡市場(いちば)を追われれば、キミンさんに行き場はない。郡市場(いちば)にキオスクを持つ話が現実的でないことを実感すると、キミンさんは妻スピさんや兄弟姉妹をシンゴサリ郡に残し、自分はスマトラ島ジャンビ州へ出かける決意を固めた。同じマラン県のパキス郡に姉(図3の(10))夫婦がいようと、隣県のパスルアン県ノンコジャジャル郡に隣人がいようと、ジャカルタにいとこがいようと、キミンさんはたまたま甥の友人がいるだけのジャンビに行く決心をした。彼にとって、商売競争の激しいジャワ島でより遠くスマトラ島のジャンビへ出かせぎに行くほうが儲かるだろうという経済的な判断が、地縁・血縁ネットワークを重要視する気持ちにはるかに勝っている。

2005年5月、ジャムー売りスキさんの母方のいとこで、鶏そば売りのウィルさん(男性、1974年ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村生まれ、図3の(8))は、マラン県シンゴサリ郡界隈で流行っていたピリヤード賭博に夢中になり、負けがかさんで借金に苦しんだあげく、マ

ランーアラバヤ街道に面した商売場所を手放すはめになった。イスラム教なるものよりも土着信仰を重視してきたソロ地方特定地域の人びとのなかには、数字合わせなどの小さな賭けごとを趣味とする人や酒をたしなむ人がある。それでも、商売に身が入らなくなるなどの度を越した趣味や嗜好は、徹底的に軽蔑される。親族をふくむ同郷の出かせぎモノ売りたちのウィルさんにたいするまなざしもたいへん冷ややかで、同情はほとんど集まらなかった。借金返済のために少しでもカネの必要なウィルさんは、屋台骨、ビニール覆い、大鍋などの道具一式つきの商売場所を400万ルピア（約5万2000円）で実兄のパルモさん（図3の（11））に売却した。パルモさんは、実弟ウィルさんの戦略的な商売場所に興味を持ち、ウィルさんが赤の他人に廉価で売却するくらいなら、自分がそこで商売するチャンスを手に入れたかった。ソロ地方特定地域出身の出かせぎモノ売りは、商売ごとにかんして冷徹である。つねに商売人としてのメンタリティを發揮する。兄弟間でさえも、情に任せた取引を回避する傾向にある。シンゴサリ郡の陸軍官舎で鶏そばを行商してきたパルモさんは、息子ウニルさん（1983年ウォノギリ県スロゴイモ郡B村生まれ、図3の（12））にウィルさんの商売場所を与えて、自分は相変わらず行商を続けている。商売場所も商売道具も失ったウィルさんは村に引き揚げ、妻の実家に世話になる始末である。

- 村には、兄弟姉妹関係も親戚関係もあったものではない。ある問題にたいして、助け合うことがない。問題がネガティブな性質のものであればあるほど、みな裏でネチネチと言いつつ合うだけ。（前述のウニルさん、2008年10月24日聞き取り）

IV-2. ソロ地方特定地域出身者の独立独歩を好むメンタリティ

主をとる業種を好むバグスさんと、それを嫌うパルディさんとの比較の事例

III章で述べたとおり、2005年7月、ジャムー売りスキさんと鶏そば売りスブルさんの娘ドゥイさんは結婚した。夫になったのは、ウォノギリ県ジャティスロノ郡の市街地の出身で、定職のないバグスさん（1980年生まれ、図3の（13））である。結婚式を終えると、ソロ地方の一般的な習慣に従い、バグスさんがドゥイさんの家、すなわちジャティプルノ郡A村のスキさん・スブルさん夫妻の家に入った。同年11月、ドゥイさんは男児を出産し、ビンタン（図3の（14））と名づけた。

ビンタンが生まれて数カ月経ったころ、バグスさんは舅のスブルさんに誘われて、スブルさんが出かせぎ中のマラン県シンゴサリ郡へ出かせぎを始める。バグスさんは、行商でヤシの実ジュースを売ることにした。ドゥイさんの母方の叔父で鶏そば売りをするスルさん（前述、図3の（4））が近所で見つけた廢材に木切れを買い足して、バグスさんのために移動屋台を作った。ヤシの実ジュースは1杯1,000ルピア【約13円】である。20～30杯も売れば、利益が出

る。売上げの半分以上が利益になるような、割りのよい商売である。鶏そばやミートボールスープなど比較的大きな元手を必要とする商売は、一般的に利益も大きい。他方、元手は少なくてすむのに、収益率で測れば、鶏そばやミートボールスープ以上に優秀な商売がある。ヤシの実ジュース、ジャム、米粉のプディング入りのココナッツミルク飲料、緑豆ぜんざい、米粉の蒸し菓子などがそうである。調理準備時間や行商時間などもふくめた効率性も考慮すれば、ヤシの実ジュース売りなどの商売の魅力はさらに増す。そのうえ、マラン県シンゴサリ郡におけるヤシの実ジュースの商売は、鶏そば売りやジャム売りに比べて他者との商売競争が激しくない。ただし、ヤシの実ジュースのような氷入りの飲みものの売れ行きは、天候に左右されやすいのが難点である。

バグスさんの行商は、順調そうにみえた。ところがそれから1カ月も経たないうちに、行商が重荷だったのか、出かせぎ先での日常がおもしろくなかったのか、彼は突然商売を止め、妻子のいる村へ戻ってしまった。結婚前、彼は出身地から約130km西に位置するジョグジャカルタ特別州スレマン県のシーフード屋台の手伝いとして出かせぎをしていたことがある。屋台の所有者は、彼の遠縁であった。しかし、バグスさんの父母、兄弟姉妹、祖父母、伯父伯母、叔父叔母などの近い親族に、出かせぎ経験者はいない。彼の隣人の多くも、モノ売りとして出かせぎに行くことなく、村役場で働いたり、地元でながしかの商売をしたりしている。

筆者のフィールドワークによれば、バグスさんの出身村のようにモノ売りとしての出かせぎ慣行のあるソロ地方特定地域の内部に位置しながらも飛び地的に存在し、モノ売りとしての出かせぎが盛んでなかったり、出かせぎ歴の浅かったりする村むら（ウォノギリ県諸郡のごく中心部に多い）、あるいはソロ地方特定地域に南西で接するウォノギリ県南部（ングントロナディ郡、プラチマントロ郡、エロモコ郡など）やジョグジャカルタ特別州グヌン・キドゥル県（ウォノサリ郡、スマヌ郡、スミン郡、カランモジョ郡など）の各一部地域には、ある共通する特徴がみられる。そこからは、かつてバグスさんがおこなっていたような、他人を手伝ったり、他人に仕えたりする出かせぎ様式が多く発生する。彼らは、モノ売りとしてよりも、家事手伝い、運転手、レストラン従業員などの主をとる業種による出かせぎをしばしばおこなってきた。²⁹⁾ 他人を主人としてその後ろで働くのは窮屈であれ、気楽さもあるように思われる。あまり自分で考えずにすむし、責任も軽い。これに反して、以下に事例を挙げるとおり、主をとる業種を好まず、独立独歩のモノ売りになることを好むのが、ソロ地方特定地域の出身者である。彼ら

29) グヌン・キドゥル県出身者の場合、昨今、ジョグジャカルタ特別州内やジャカルタ首都圏ヘミートボールスープ売り、鶏そば売り、ジャワ風そば売りなどのモノ売りとして出かせぎに行く人も増えている。本論の主要舞台・ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村をふくむウォノギリ県東部にも、モノ売りとしての出かせぎ慣行が生まれる以前、家事手伝いとして出かせぎに行く人がいたが、現在はほとんどいなくなっている。

の場合、どんなに多くの苦労があれ、どんなに小規模の商売であれ、ひとり立ちして、より多くの儲けを手にする可能性を追求する性向がある。³⁰⁾

スキさん・スブルさん夫妻には、婿のバグスさんが早々に出かせぎを止めたことを責めるそぶりはない。「妻子のために働け」と彼に腹を立てるよりも、元気なうちは自分たちが娘・娘婿と孫のために、稼げばよいと思っている。今のところ、バグスさんが出かせぎモノ売りに復帰するようすはない。A村から遠くないスロゴイモ郡の市場（いちば）で、彼はときどき駐車係として稼いでくる。そのほうが、モノ売りをするより彼の性に合っているらしい。

スキさんの遠縁に当たるスリさん（1976年ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村生まれ、図3の(15)）は、同郷出身で鶏そば売りの夫パルディさん（図3の(16)）とともに、以前はマルク州ハルマヘラ島北部トベロに出かせぎをしていたジャムー売りである。

1999年に発生したマルク騒乱³¹⁾の折、スリさん・パルディさん夫妻は、スリさんの両親が出かせぎ中のマラン県シンゴサリ郡へ一時避難した。そしてそこで、新たに商売を始めてみた。しかしパルディさんは同地での鶏そば商売に苦戦し、すぐに建設現場工としてジャカルタへ去っていく。彼が苦戦した理由のひとつは、すでに多く（9人）の親族が鶏そば商売をしているために競争が激しく、戦略的な商売場所を見つけられなかったことにある。また、鶏そば一杯にいかなる高値をつけようとも簡単に売れていくような住民の購買力が高いマルク州での商売に慣れていたため、薄利多売を原則とするシンゴサリ郡での商売にたいして負担を感じたことにもある。夫がジャカルタへ去ったのちも、シンゴサリ郡の中心部から約10km離れたC村で、スリさんはひとりジャムーの行商を続けた。

ジャカルタに移ったパルディさんは、どうしてもモノ売りに戻りたいと思ったという。モノ売りの経験が長い人に、中締めに牛耳られて窮屈なうえ、日当も小さい、建設現場工としての仕事は耐え難いものである。まして彼は、ジャワ島の外での、割りのいい行商を知っている。7カ月間ジャカルタで建設現場工をすると、パルディさんはマラン県シンゴサリ郡へ妻を迎えにきた足で、妻とともに南スラウェシ州シデンレン・ラパン県ドゥア・ピトゥ郡に向かった。そこでミートボールスープ売りをしている実兄を頼っての出かせぎである。ドゥア・ピトゥ郡のような都会から離れた村落部での商売は、顧客がつくまでは苦労するであろうが、他者との商売競争はそれほど激しくない。商品の販売単価は、相対的に高く設定することができる。「ぜったいにうまい商売になるはず」と、夫妻にとっては心弾む出発であった。

スプリさん（1980年ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村生まれ、図3の(18)）はスリさん

30) このあたりのメンタリティの差異も、ソロ地方特定地域の境界を設定する条件になる。詳細については、別稿を準備中である。

31) 1999年のレバランに発生した暴動を契機に、マルク州アンボンで発生した地域紛争。2002年マリノ和平協定が敷かれ、2003年非常事態宣言が解除されるまで、不穏な状態が続いた。

のいところであり、異母異父弟である。出身村の中学校を卒業後、東ジャワ州マラン県シゴサリ郡にやってきて、叔父のキミンさん（前述、図3の(9)）にノウハウを教わり、やがてひとり立ちして鶏そば売りになった。スラバヤーマラン街道に面するプラスチック工場の入り口前に屋台を構えていたころ、彼の商売は順調だった。1日5kgの麺を売り切れるようになる³²⁾と、彼は釣りを趣味に持った。一週間に一度商売を休んで、釣堀に出かけたり、5万ルピア（約650円）の参加料を支払って釣り競争に参加したりするようになった。このようなカネのかかる趣味を持つこと、あるいは若いスプリさんが余暇を謳歌することにたいして、同じシゴサリ郡に出かせぎ中のモノ売り一族からの反発は小さくなかった。ほかのモノ売りたちが、寸分を惜しんで働き、稼ぎは貯められるだけ貯めているなか、彼のような今を楽しもうとする人生観は、だれからも容認されなかった。

やがて、プラスチック工場から直接許可を得て、工場敷地内にある社員食堂の前で鶏そばを商う人が現れたため、工場の入り口前に屋台を構えるスプリさんの商売は大きなダメージを受ける。彼の鶏そばは、まったく売れなくなった。数週間売れないと、元手が焦げつき、商売が立ち行かなくなる。そうなる前に、商売場所を変えたり、広域の行商に切り替えたり、なにか手を打たなければならない。実のところ、工場敷地内で商売を始めた鶏そば売りは、スプリさんの遠縁（図3の(19)）に当たる。工場敷地内に屋台を出せるようになった人にたいしてその幸運さを贅辞する声が挙がっても、「スプリの商売を邪魔してまで……」などという非難の声は、親族内で公には挙がらなかった。それどころか、すでに「釣り好きの遊び人」のレッテルを張られたスプリさんに同情はまったく集まらなかった。それゆえ、工場の入り口に代わる商売場所や行商ルートにかんする情報も、ほとんど彼に寄せられなかった。

鶏そば商売に行き詰まると、スプリさんは元締めにいる輪タク（ベチャツ）牽きになるほかなかった。親方に輪タクを賃借りする輪タク牽きにあっては、鶏そば売りのように稼ぐことは無理である。「鶏そば売りとしてもう一度やり直したい」と考えた彼は、マラン県パキス郡で手広くミートボールスープ・鶏そば商売をする父方の伯父・モさん（50歳代、ウォノギリ県ジャティプルウォ郡D村生まれ、図3の(20)）のところで、どんぶり洗いや鶏や野菜の下ごしらえからもう一度始めることにした。

モさんは、ふたたび鶏そば売りとして独立できる日を夢見て働くスプリさんに特別の温情を掛け、彼にバイクを買い与えたり、会計を任せたりした。ところが、そのような状況は長く続かなかった。一年を待たずして、スプリさんはモさんのもとを離れ、輪タク牽きに舞い戻って

32) 1kgの麺は約11杯の鶏そばになる。1日5kgの麺を仕入れて、1杯3,000ルピア（約39円）の鶏そばとして売り切ることができれば、16万500ルピア（約2,145円）の売上げになる。原材料費などを清算すると、7万～8万ルピア（約910～1,040円）の利益（平均的な工場労働者の日当の約2～3倍）を得られる。

いる。ふたりのあいだにながったのか、彼ら自身からも、ほかの親族からも語られない。筆者からそれを聞いてはならないような雰囲気さえある。スプリさんの事例は、ソロ地方特定地域の出身者が他人を主とする業種より独立独歩の業種を好む傾向と、彼らにとって商売ごとに温情主義を持ち込むのは適当ではなく、それを持ち込んだことで大切な二者関係が断ち切れてしまった悲劇とのふたつを示す一例である。³³⁾

IV-3. ソロ地方特定地域出身者のあいだの地縁・血縁ネットワーク

ある土地へ出かせぎを始める際、大多数のソロ地方特定地域出身の人びとは、地縁・血縁ネットワークをもちいている。特定出かせぎ先に新規の出かせぎ者が入り込むには、すでにそこの商売競争が激しくなりすぎている場合も多い。それでも、先にそこへ出かせぎをしている人の多くは、自分の手伝いや実習生として新参の後続者を受け入れる傾向にある。出かせぎ商売に成功した人が、村にいる兄弟姉妹をふくむ親族や友人になんらかの形で一時的にその利益を分配したとしても、彼らに出かせぎ商売を開始する機会を与えないのであれば、長期的には村での貧富の差や「貧困の共有」的な状況をむしろ増長させる。そうではなく、ソロ地方特定地域出身の出かせぎ先駆者は、後続者に出かせぎの機会そのものを拓いてきた。出かせぎ機会の共有は、個々人が自立的に努力するなかで「豊かさの共有」につながってきたようにみえる。

実際に、出かせぎ商売のノウハウをマスターすると、後続者は別の場所を見つけて独立してやっつけていかなければならないという暗黙の了解が、先駆者—後続者のあいだに存在している。³⁴⁾

33) スプリさん以外にも、モさんの商売を手伝う親族成員がときどきいる。レバラン期間の一年でいちばんの繁雑なとき、モさんの義弟の義弟（1962年ウォノギリ県ジャティプルノ郡A村生まれ。通常はマラン県シンゴサリ郡にてかき氷売り）、モさんの義弟の娘婿（1980年ウォノギリ県ジャティプルノ郡D村生まれ。通常は中ジャワ州ブルウォルジョ県にて緑豆ぜんざい売り、図3の(21)）などがモさんの店舗で手伝いをする。スプリさんとここで挙げたほかの親族成員との違いは、前者がモさんのもとへ徒弟として身を寄せたのみにたいして、後者はあくまで臨時の手伝いとしてモさんにとこで働く点にある。モさんを親方として働いている・働いたことがあるのは、モさんの核家族成員（モさんの妻[図3の(10)]、息子[図3の(22)]、娘[図3の(23)]）とスプリさんのほかは、親族成員ではない。モさんと同じパキス郡へ出かせぎをして、モさんの家に下宿をしながらも、モさんとまったく別箇にミートボールスープを行商する親族成員（図3の(24)と(25)）もいる。

34) 前述のスキさん一族の場合、一族の新参者がマラン県シンゴサリ郡中心部でジャム—商売に新規参入できるのはすでに商売中のだれかが引退する場合にかぎられると、非公式に決まっている。あるいは、前述のスリさんの例にみるとおり、新参者はシンゴサリ郡のなかでも中心部から離れたところで開業しなければならない。したがって、シンゴサリ郡中心部で商売するスキさんと同郷のジャム—売りの数は十年來増えないままである。2005年、スキさんの母方いとこのつれあい（図3の(6)）が体を壊して引退した。代わりにその義妹（図3の(7)）がシンゴサリ郡中心部での商売場所を引き継いで、ジャム—売りになっている。夫が鶏そば売り（図3の(8)）をしている彼女は、結婚以来ずっと同郡入りをしてきたものの、狭い商売範囲を親族で取り合うのを避け、義妹が引退するまでジャム—売りをするのがなかった。筆者のフィールドワークによれば、少なくとも「ジャム—売り集団」の世界において、参入の自由というバザール経済の特徴は通用しにくい。

そして新しい商売場所を探し求めるバイタリティは、大部分の後継者にみられる。³⁵⁾「ジャムー売り集団」がジャカルタ、バンドゥン、スラバヤなどジャワ島の大都市ばかりでなく、スマトラ島のメダンやバンダル・ランブン、スラウェシ島のマカッサル、カリマンタン島のバンジャルマシヤやバリッパパン、バリ島のデンパサールなど各島の大都市にも、マルク州西部南東マルク県のサウムラキ、同州アル諸島県のドボ、同州南東マルク県のトゥアル、北スマトラ州サモシル島など僻地の郡村にも、全国に限なく入り込んでいる事実、すなわち、すでに地縁・血縁ネットワークが張り巡らされた場所にだけ出かせぎに行くのではなく、つねに新開地を求めてきたという事実は、暗黙の了解が存在することの証拠である。

IV-4. ソロ地方特定地域出身者のあいだのボンドック制度

ソロ地方特定地域からの出かせぎ先をインドネシア全国に拡大させる役割を担ったのが、1950年代初旬から同地域出身者に利用されてきたボンドック制度である。今日、ボンドック制度はすでにあまりポピュラーではない。インドネシア東部のマルク州アンボン、パプア州や西パプア州などの超遠隔地を目指すケースにたいしてを除けば、同制度はそれほどたくさん残っていないかもしれない。1960～70年代に同制度が盛んに利用された時代に比べれば、出かせぎ先に関する情報や出かせぎを開始するための初期資本を親方に頼らずともなんとか自分で都合できる時代になったというのが、その主な理由である。

ソロ地方特定地域出身者のあいだに敷かれるボンドック制度は、古くから永続的なものではなかった。たいていは6カ月から12カ月のあいだ、商売利益のおよそ半分を納める形³⁶⁾で、徒弟は親方の下に縛られる。しかし、一定の契約期間が過ぎ、徒弟がひとり立ちしてアイスクリーム、ジャムー、ミートボールスープなどを商うことができると感じ、親方のほうも出かせぎ先までの渡航費用等が清算されたと感じるようになった時点で徒弟が独立することにより、親方—徒弟制度は解消される。聞き取りによればアイスクリームやミートボールスープの作り方や商売ノウハウを秘密にして、親方が徒弟をいつまでも自分のもとに縛りつけることはめったになかった。親方は、独立を志す徒弟との商売競争を恐れることなく、徒弟が自立して商売を興す機会をつねに与えてきた。独立した徒弟も親方に既得権のある商売地域を意図的に侵す気はなく、多少なりとも親方と離れた場所で自分自身の商売を始めていく。彼らのあいだの親方—徒弟制度はリベラルで、エチケットに護られた制度として機能してきた。

35) 「(引用者注；出かせぎ) 先駆者は貧しいながらも、同郷の親類縁者に、自分のシマや、商業上のノウハウ、得意先の一部などを分け与えてやる。共存共栄とはいかず、共存共貧である。とりあつかう商品や顧客が、とくに増えるわけではない。それなのに、ただ働き手ばかりが増える」[村井 1978: 135] という「貧困の共有」の状況は、「ジャムー売り集団」において意識的に避けられてきた。彼らの出かせぎに果たす地縁・血縁ネットワークの役割については、拙稿 [間瀬 2010] を参照。

36) 親方—徒弟間における商売利益の分割システム (sistem bagi hasil) は多様であるが、マロ (maro)、マロン (maron)、パロ (paro)、パロン (paron) などと呼ばれる均等分が一般的である。

- 親族成員はみな、わたしとは別に商売をしている。妻のほか、わたしの商売を直接手伝う親族成員はいない。目下、わたしの手伝いは、妻の故郷近くの中ジャワ州カラニアニャル県の村から連れてきている。親類縁者ではない。その辺りに行けば、手伝いを探すのはそれほどたいへんではない。(スワルディさん、50歳代男性、中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡出身、16人の徒弟を率いて、マルク州アンボン市でミートボールスープと鶏そばを商う親方、2007年3月11日聞き取り)

出かせぎにいざなう初期費用（渡航費、宿泊、商売道具などの、徒弟への投資）を考慮すれば、村から連れてくる徒弟をできるかぎり長く繋ぎ止めておく、悪く言い換えれば、もっと搾取するほうが経済的に得であるはずなのに、ソロ地方特定地域出身の親方は、相対的に短い一定期間を経ると、親方—徒弟関係をあっさりと解消してしまう。それはおそらく、彼らが親方—徒弟関係（パトロン—クライアント関係）から生じるコストから逃れようとすることに関連している。親方—徒弟関係は一般的互酬性を基調とする二者関係の深化版である。それゆえ、相互扶助精神で徒弟をかばうコストが、多かれ少なかれ付随する。相互扶助的に徒弟との関係を構築すれば、徒弟の家族で催される冠婚葬祭、徒弟の健康管理、徒弟の帰省にともなう小遣い工面など、親方はさまざまな出費につきまといわれる。さらに、親方にとって親方—徒弟関係が面倒なのは、同関係をもとにした出かせぎ商売で金銭トラブルなどが発生した場合、（多くは）同郷の出身者である徒弟のみならず、その家族との関係にもひびが入ってしまう可能性を否定できないからである。そうなるまえに、大切な人間関係を商売ごとから切り離しておくのが得策であるとする姿勢がソロ地方特定地域の人びとにみられる。³⁷⁾

徒弟になるソロ地方特定地域出身者の大多数が、親方—徒弟関係という一般的互酬性を敷いて行動するのに不慣れで、他人に縛られるのが好きではないというメンタリティも無視できない。したがって、同地方出身者のあいだにポンドック制度を介する関係が長々と切り結ばれることは少ない。

- ソロ地方出身者は親方に縛られるのが嫌いで、独立独歩を好む。出かせぎ開始当初は親方の下にいても、近いうちに独立する。(ジャロットさん、40歳代男性、中ジャワ州スコハルジョ県ングトゥル郡出身、首都ジャカルタで焼きめし・焼きそば売り、2005年4月28日聞き取り)
- 独立して商売しないと、もうからない。親方の下になどいられない。(ワロヨさん、50

37) 親族や友人のあいだで合資して起業するのを嫌う「ジャム—売り集団」の場合、商売規模を拡大させていくのは困難である。彼らがフランチャイズを展開するような大規模な事業を立ち上げる例は、それほど多くない。彼らのなかには、長期間に渡って行商や零細店舗での商売を続ける個人営業者が圧倒的に多い。

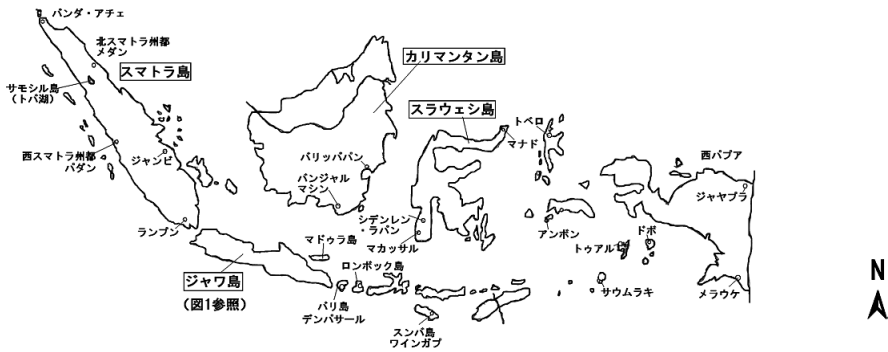


図4 インドネシア全図，および本論関連地名

出所：著者作成

歳代男性，スコハルジョ県ブンドサリ郡出身，中ジャワ州パティ県にてミートボールスープ売り，2004年1月6日聞き取り)

- 1年半経ったら，徒弟は独立してもよいことにしてきた。実際に，彼らの大半は独立していく。(前述のスワルディさん，2007年3月11日聞き取り)

V 結び

まとめると，ソロ地方特定地域出身の「ジャム－売り集団」は，核家族を制度的な基礎としている。また，共同体的な温情主義から距離を置く均衡的互酬性や個人主義が彼らの行動様式を支配する特質である。その結果，「ジャム－売り集団」の成員はそれぞれ自分のかせぎを最優先し，パトロン－クライアント関係を回避し，核家族以外の親族，隣人，同郷の友人の関係を商売にまつわる関係から切り離すような出かせぎ経済活動を営んでいる。

本論は，ソロ地方特定地域出身の「ジャム－売り集団」の一事例をできるかぎり詳細に記述し，分析することに力点を置いた。しかし，この一事例が示唆するところの共同体や相互扶助の概念に相容れないものを広く東南アジアに応用してみると，村落部における社会と経済のありかた，そしてそこに住む人びとの行動様式にたいして新たな考察を加えられるように思われる。

引用文献

- Evers, Hans-Dieter. 1975. Urbanization and Urban Conflict in Southeast Asia. *Asian Survey* 15 (9): 775-785.
 Geertz, Clifford. 1960. *Religion of Java*. New York: The Free Press.

- . 1963. *Agricultural Involution*. Berkeley: University of California Press. (ギアツ, クリフォード.
2001. 『インボリューション 内に向かう発展』池本幸生 (訳). NTT 出版)
- ギアツ, ヒルドレッド. 1980. 『ジャワの家族』戸谷修; 大鐘武 (訳). みすず書房. (原著 Geertz, Hildred.
1961. *The Javanese Family: A Study of Kinship and Socialization*. New York: The Free Press)
- Jay, Robert. 1969. *Javanese Villager*. Cambridge: The MIT Press.
- Jellinek, Lea. 1977. The Pondok of Jakarta. *BIES* 13 (3): 67-71.
- Koentjaraningrat. 1994. *Kebudayaan Jawa, Seri Etnografi Indonesia* [ジャワの文化——インドネシアのエスノ
グラフィシリーズ]. Jakarta: Balai Pustaka.
- 倉沢愛子. 2007. 「外来者の流入と都市下層社会の変容」『都市下層の生活構造と移動ネットワーク——ジャ
カルタ, 東京, 大阪, サン・クリストバルのフィールドワークによる実証』(慶應大学東アジア研究所
叢書) 倉沢愛子 (編著), 15-99 ページ所収. 明石書店.
- 間瀬朋子. 2010. 「地縁・血縁にもとづく連鎖移動論を乗り越えて——中ジャワ州ソロ地方出身のモノ売り
の事例から」『アジア経済』51 (9): 28-55.
- 宮本謙介. 1993. 『インドネシア経済史研究——植民地社会の成立と構造』ミネルヴァ書房.
- 宮崎恒二. 1977. 「ジャワ村落における個人規定カテゴリー」『社会人類学年報』3: 157-178.
- 森 弘之. 1969. 「ジャワ“土侯領”の村落構造の歴史的变化」『インドネシアの社会構造』(アジア経済調
査研究双書 172), 258-293 ページ所収. アジア経済研究所.
- 村井吉敬. 1978. 「インドネシアの民衆生業」『アジア研究』24 (4): 57-82.
- 内藤能房. 1977. 「19 世紀ジャワの『土地占有形態』再考——ジャワの村落の歴史的性格に関する一考察」
『アジア研究』24 (1): 44-74.
- 中西 徹. 1997. 「都市インフォーマル部門」『事典東南アジア』京都大学東南アジア研究センター (編),
538-539 ページ所収. 弘文堂.
- Papanek, Gustav, F. 1976. Penduduk Miskin di Jakarta [ジャカルタの貧困住民]. *Prisma* 1 (Feb): 59-83.
- 関本照夫. 1976. 「中部ジャワ農村の儀礼的食物交換——スラカルタ地方の事例より」『国立民族学博物館
研究報告』1 (3): 457-504.
- . 1978. 「農業をめぐる人のカテゴリーと相互関係——中部ジャワの一事例」『国立民族学博物館
研究報告』3 (3): 345-415.
- . 1980. 「二者関係と経済取引——中部ジャワ村落経済生活の研究」『国立民族学博物館研究報告』
5 (2): 376-408.
- . 2004. 「不平等社会に見る平等への契機——ジャワ農村の事例」『平等と不平等をめぐる人類学
的研究』小川 了 (編), 92-133 ページ所収. ナカニシヤ出版.
- 嶋田ミカ. 1997. 「中部ジャワにおける市場 (いちば) の将来——京都公設小売市場との比較研究」『経済
学論集 (国際学特集)』龍谷大学: 65-81.
- 染谷臣道. 1984. 「宗教儀礼クンドゥリ (スラムタン) の座順における社会的序列——中部ジャワ農村の事
例から」『社会学討究』30 (1): 135-168.
- 新聞
- Kompas*, October 26, 2009. Menggendong Jamu dan Kehidupan. [ジャムを背負い売り歩いて, 生計を立てる
こと]